

EMILIO PUCCI

フィレンツェの侯爵、プリントの王

ブランド設立60周年を迎えたエミリオ・プッチ。貴族出身ならではのライフスタイルをデザインし、色彩豊かな幾何学プリントを生み出し、活動的に女性を解放したことが成功への秘訣。ゆるぎないオリジナリティだからこそ、時代を超えて愛されるブランドであり続けています。

撮影/WOO(モデル)、宇戸浩二(静物) スタイリスト/橋本早苗 ヘア・メイク/木暮モエ(HEADS) 取材・構成/柳武麻実 デザイン/ファブ



M.モンローも愛用



スワロフスキーのクリスタルがあしらわれたフリンジ付きベルトで巻きつけたスタイルは、M.モンローが好んだことで、別名「マリリン・ドレス」とも呼ばれています。彼女はプッチを愛したセレブリティの筆頭であり、1999年にクリスティーズ開催のワードロープオークションでも、プッチのアイテムが多く出品されました。シルクジャージーのワンピースは、フィリピンのリゾート地、レイテ島から名づけられた「LEITE (レイテ)」柄プリントで、1974年の複製柄。¥176,400 (エミリオ・プッチ/エミリオ・プッチ銀座店)

中野香織

服飾史家、コラムニスト。ケンブリッジ大学客員研究員を経て、執筆活動に。「モードの方程式」が「クール」をめぐる鼎談を収録して新潮文庫から発売に。

同じ色柄が、'60年代にはポップなムードを代弁し、'70年代にはサイケデリックな気分を象徴したが、現代女性を彩るプッチ柄が表現するのは、自信に裏付けら

れた脱力感だろうか。デラックス・リラックス。へたな造語ですが。プッチという名前からして、声に出すのが楽しい。色の躍動感を守り立てる。日本語で発音すると軽やかに聞こえるが、創業者のプッチ家は侯爵家という由緒正しい家柄である。バルセント侯爵エミリオ・プッチがスキーウエアをデザインしたのがブランドの始まり。フィレンツェの大邸宅とスイスの山々、カプリ島のリゾートを行き来するライフスタイルから自然に生まれたリゾートウエアが原点だからこそ、ゴージャスなリラックス感がブランドの核となりうる。

'60年代プッチドレスのりバイバル版も続々登場しているが、私がひそかに復活を期待するのが、プランニング航空のアテナダント向けユニフォームとして作られた、バブルヘルメット。空港ビルから飛行機に乗り込むときに髪型がくずれるのを防いだ、透明な巨大ヘルメットである。梅雨時のファッションナブルなヘッドギアとして……いかがでしょうか？

昔も今もINなプッチ

中野香織

進化するブランドSTORY

1914年に生まれたエミリオ・プッチ。彼のデザイナーとしての歴史は、'47年にハーバース・バザー誌に、スマートなスキーウエアを発表したことが始まり。瞬く間にアメリカからの注文が殺到。次に海辺でのリゾートウエアをデザインし、'50年にはカプリ島にプティックをオープン。色彩のマジシャンとして人気を博す。当時は体を締め付ける、そして重いオートクチュールのドレスが主流だったが、エミリオは、ストレッチ素材で、女性に自由な動きを与え

た。'60年代の最も有名な幾何学模様のプリントのシルクジャージードレスは、シワになりにくく、わずかに170gと軽量、しかもハンカチサイズに折り畳むことができ、ジェットセッターの究極のシンボルに。'70年代にはドレスのほか、リネン類、バッグ、香水、ラグなどを発表。'90年代に再び脚光を浴び、'92年に亡くなった後は、娘のラウドミアが仕事を引き継ぐ。2006年秋冬コレクションより、マシュー・ウィリアムソンがクリエイティブ・ディレクターに。



〈写真上〉エミリオと、スキーウエアを着た友人との1948年の写真。前年、ハーバース・バザー誌に最初の作品である、流線形のスキーウエアを発表。〈写真左・右〉1966～'69年当時のシルクジャージードレス。シンプルながら、独特の色合わせは今見ても新鮮。〈写真左・左〉クリエイティブ・ディレクターのマシュー・ウィリアムソンとも親交が深い、シエナ・ミラー。'07年春夏コレクションのドレスとネックレスを着用。

